

平成 30 年度 第 2 回 豊岡市総合教育会議（定例会）議事録

○ 開会及び閉会の日時及び場所

平成 30 年 11 月 29 日（木）

場 所 豊岡市役所 3 階 庁議室

所在地 豊岡市中央町 2-4

開会時間 午後 1 時 30 分

閉会時間 午後 3 時 25 分

○ 出席者及び欠席者の氏名

出席者 豊岡市長 中貝 宗治

豊岡市副市長 森田 敏幸

豊岡市教育委員会

教育長 嶋 公治

委員 深田 勇

委員 佐伯 和重

委員 向井 美紀

委員 飯田 正巳

○ 事務局等関係者の氏名

事務局 教育次長 堂垣 真弓

教育総務課長 正木 一郎

こども教育課長 飯塚 智士

こども教育課主幹兼指導係長兼指導主事 高田 健一郎

こども教育課主幹兼指導主事 寺坂 浩司

こども育成課長 宮本 ゆかり

こども育成課参事兼課長補佐 山根 哲也

こども育成課幼児教育保育指導係長 仲義 健

教育総務課課長補佐 木之瀬 晋弥

教育総務課主幹兼教育総務係長 若森 和歌子

政策調整部長 土生田 哉

政策調整課長 永井 義久

大交流課長 谷口 雄彦

大交流課観光文化戦略室長 岡 亮吾

○ 日程

1 開 会

2 あいさつ

3 協議事項

(1) 専門職大学との連携について

## (2) 英語遊び保育・英語教育について

4 その他

5 閉会

### ○ 会議の概要

---

開会 午後1時30分

---

#### 【日程1 開会】

(堂垣教育次長)

ただ今から、平成30年度第2回の豊岡市総合教育会議を開催いたします。前回に引き続きまして、私のほうで司会進行をさせていただきたいと思っておりますので、よろしく申し上げます。まず始めに、会議の主宰者であります、中貝市長よりごあいさつを申し上げます。

#### 【日程2 あいさつ】

(中貝市長)

皆さん、お疲れさまです。地方創生ということを言い始めて、いろんな若い人たちと対談をする機会がありました。まだこれは、本当にその場での経験談でしかありませんけれども、総じて感じるのは、若い人たちがやたらと豊岡が好きだということです。それは高校生もそうですし、あるいは大学に行っている人たちもそうですし、もう豊岡に帰ってこずに豊岡以外で暮らしている女性たちと話をしてみても、総じてあつけらかんと「豊岡が好きだ」というふうにおっしゃる。自分の高校のときと比べると、明らかに違う。僕自身、豊岡が好きかと言われたら、好きと言ったかどうかわからないです。ほとんど関心がなかったと言っていいと思います。そういった話をすると、だいたい同世代の同級生は「そうだ、そうだ」と言って、「最近の子は変だよな」という話をするのですけれども、たぶんこれは2000年前後ぐらいから始まったと思われるふるさと教育の積み重ねの成果なのではないかという気がします。もちろん、それまでも地域の人たちは、いろんなことを教えてきたつもりでしたのでしょうけれども、子どもたちがいなくなって大変だという意識はそんなに持っていなかった時代ですから、明確な目的意識を持って、こんなすてきなまちだということを教えてこなかったのではないかというふうに思います。あるいは、印象的に教えるというところまではなかったのではないかと思います。それが長い間の蓄積によって、少なくとも豊岡が好きだという子どもたちがいるというところまでは、成功してきたのではないかと思います。

ただ、それでも帰ってこない。出ていくのは仕方がないとしても、それでも帰ってこない。ここがまだ課題として残っているわけですが、けっこう私たちはあと一步のところまで来ているのではないかという、そんな気がいたします。ということで、希望を持ってがんばっていきたいと思っています。

最近こんな記事がネット上に出了ました。「過疎が終わる」という記事でありまして、持続可能な地域社会総合研究所所長の藤山さんという方の文章で、「未来に歩みだす中国山地」というタイトルがついていますが、中国山地では、ここはもともと過疎という言葉が生まれた日本の過疎の元

祖みたいなところですけども、限界期が始まっていると。2010年、2015年の国勢調査データを比較すると、県境沿いの自治体では東から、西粟倉村、勝央町、ずらっと名前が挙がっていて、社会増になっている。30代女性の流入がさらに広範囲となっており、島根県では中国山地沿いのすべての町村が転入超過である。これは必ずしも帰ってきているとは限らないと思いますけれども、明らかに価値の転換点のようなものが起きていて、具体的なかたちを取り始めているのではないかというふうに思っています。

先ほど冒頭申しあげたことを照らし合わせる時に、確かに、あと1つ突き抜けていく必要があるというふうに思っています。これまで小さな世界都市だということを言い、ローカル&グローバルコミュニケーションと言い、地方創生としてはかなり大がかりな仕掛けをやってきて、その分、どうしても全体がスロースターターみたいな感じになっていますけれども、こういったものがやがてスピードを増してくることによって、場合によったら、本当に結果につながる可能性があるというふうに感じています。そんなことで、また教育委員会の皆さんとも力を合わせて、がんばっていきたいというふうに思っています。

それから、教育長と次長はご存知ですけども、この間の職員採用の3次面接前のグループワークの2日目の質問、こういう問題です。7人のチームで、90分でグループワークをやる。その質問です。まず、ユーチューブで以下の楽曲を検索し、みんなで聴いてください。太田裕美「木綿のハンカチーフ」、この曲は昭和40年代の東京と地方のイメージを鮮烈に表した流行歌でした。豊岡市はこのような固定したイメージを払拭するところから地方創生、人口減少対策が始まると考えています。問題、「皆さんは、豊岡市役所に就職後、Iターン戦略の担当となりました。そこで、木綿のハンカチーフを克服できるような歌詞を考えるための諮問委員会を設立することになりました。どのような出席者がいたら、会議の議論が面白くなるかを考え、会議のシナリオを作りなさい。これを8分から12分のディスカッションドラマに仕立てなさい」ということで、問題を見た瞬間に「ワーッ」と声が、心の声が上がっていました。「えらいこっちゃ」というような。一斉に木綿のハンカチーフが流れて、これはさらにいろいろ参考というのがついていまして、「以下の楽曲を聴いてみるというかもしれません。このような二項対立にしないことが大事です。吉幾三「俺ら東京さ行ぐだ」、替え歌「俺ら東京を出るだ」作詞たすくこま、こういうのを読みなさい」というようなことが出ていて、けっこう楽しい90分間で、本人たちは大変だと思いましたが。ところが、別にいい作品ができてることによって点がよくなるということでは全くなくて、この90分の製作過程がどのようになされるかを見るというのが実はポイントです。誰がリーダーシップを発揮したのか、誰がフォロワーシップを発揮したのか、誰が混乱した議論を本来のルールに戻したのか、誰がシャイで言葉を発せない人に対して、助け船を出したとか、そういうものを90分間、市の職員3人がもうずっとぐるぐるぐるぐる回りながらチェックをしていって、点数をつけていく。その結果を聞いた上で、僕たちが面接をするという、こういった動向です。これはいったいどういう人材を求めているかということです。誰か非常に出来のいい人がいて、正しい答えを知っていて、そのことを伝えて、組織とかグループを説得して、みんながその一致の基に進んでいくという、そういった人材を求めているわけではありません。そうではなく、これは特に二項対立にしないということをあえて書いてあります。どうすれば議論が混乱するかを考えなさいというふうに書いてあります。何なのかというと、人はみんな意見が違うという前提に立っています。みんな違う、もちろん、数学のように絶対的な正しさがあつたり、物理学的な正しさであるのですが、人間の世界というのはそういうものも確かにあるけれども、一方でみんな違

う、みんな正しいという世界が現実にある。そのみんな正しいという中で、でも1つの組織を作っている以上は、答えを1つ探していかないといけない。では、違っているもの同士が集まったときに、どのようにしてよりよいと思う答えを見つけ出すのか、そのスキルが大切だと。そのことができるような人たちを豊岡市役所に採用したいというのが、この採用試験の狙いです。だから、超有名大学に行って、バリバリ勉強ができるという人がいてもいいかもしれないけれども、チームで違いを、お互いを認め合いながら、その上でよりよい答えを見出していくという、あるいは、仲間に対して、まさに仲間として見ていく、誰かが倒れたときに、ちゃんと起こしてやるとか励ましてやるという、そして、もっといいチームとして、よりよい成果をさらに求めていくという、そういう人材を求めているということがまず根っこにあって、それがこういうことになっています。なので、二項対立にするなど。都会は物質的に豊かで、地方は精神的に豊かで、だけど若者は精神的豊かさよりも物質的な豊かさを求めて東京に行ってしまいます。僕はもう帰らない。これは太田裕美の木綿のハンカチーフですよ。大ヒットしました。僕はこれ、大学に入った頃に毎日のようにみんなで歌っていました。どんな気持ちで歌っていたのか思い出せないけれども。みんな何かそんな気分だった時代です。今度は逆に、都会は全部駄目だ、田舎はすごくいいんだというふうに、逆転するのは結局同じことになってしまう。そうではないでしょう。都会にもいいところがあり、悪いところがあり、好きなところもあり、嫌いなところもあるという、みんな見方が違う。なので、当時の作詞者松本隆さん、もし今ここに松本隆さんがこの委員会に招かれたとしたら、どう言ったかぜひ聞いてみたいと思いますけれども。おそらくもっと複雑なものが見えてきているのだらうと思います。ですので、市役所の職員はそのことがちゃんと対応できるような人であってほしいという思いを込めて、こういう試験をしています。

ところが、さらにその先ですよ。豊岡の子どもたちは、ということだと思います。これから子どもたちは、僕たちよりもっと多様な人たちと会うことになります。もちろん、宗教観も違う。例えば、イスラム教なんかは僕のイメージなんていうのは、もうISぐらいの世界で、おっかなびっくりみたいなのところですけども、でも、例えばこの間アブダビに行ったときですが、とんでもない大きなモスクですから、あれを見ると、あの人たちの美意識に本当に圧倒されます。こんな美意識を誰が育てたのだらうというぐらい、本当にすごい。一緒に行った日本人の人は、「これなら私イスラム教に改宗してもいいかも」と言うぐらいすごい。みんな違うんです。宗教も違うし、例えばイスラム教徒はまだ火葬は認めていません。土葬です。日本に移り住んだらといったら、日本は土葬を認めるのか、みたいなことがたちどころに問題になってくるわけです。それからもちろん、豚肉は駄目だとか、アルコールは一切駄目だとか、来た人たちが普通に隣近所に住むような可能性があるわけです。そういったときに、それでもなお1つのコミュニティを構成するものとして、対立をしながらも違いを認めながら、でも、最後はコミュニティとしての答えを出していくという、そういう作法といたらいいのか、姿勢を持った子どもたちを育てていかなければいけない。それがローカル&グローバルコミュニケーションなのだらうと思います。

そのコミュニケーション教育のベースに演劇を据えたというのも、これはもちろん平田さんのおかげですけども、それを受け入れた教育委員会も、極めて正しい選択をしたというふうに思います。演劇というのは、いろいろな役割が出てくる。役割は作ったり演じると、みんなそれぞれの大切さがあることがわかってくる。よく平田さんがおっしゃいますけれども、何十人殺した人間で、「それでも人間か」とマスコミは言うけれども、劇作家は「それでも人間だ」と言うのだと。つまり、その人にとっては、なんでそんなところまで追い込まれたのかということを実際に

丁寧に追いかけていくと、あの永山死刑囚のように、否定されて、否定されて、否定されて、否定されて、それでもかと否定されて、ああなってしまったわけですね。そのことを知ったときに否定できるか、もちろん犯罪リスクから死刑は仕方がないにしても、どうなのかという、そういったようなことですよ。なので、それが永山死刑囚のことではなくても、演劇をちゃんと学ぶことがもしできれば、みんな正しさがあって、ということがたぶん体感としてわかってくるのだらうと思います。

そういった子どもたちが育ってくるからこそ、実はこれからもっともっと世界中の人々が行き来をして、一緒になって何かを決定しようとするときに、必ず役に立つ。そういうのを実は大人と言います。そういうことができる立派な大人を育てるということが、言うなれば、ローカル&グローバルコミュニケーションの最大の狙いであって、今のところ豊岡市は、本当にいい方向に歩んできているのではないかと思います。その意味では、現場の皆さんのがんばりに心からの感謝を申し上げます。今日はどうぞよろしく申し上げます。

(堂垣教育次長)

ありがとうございます。次に、教育委員会を代表いたしまして、嶋教育長よりごあいさつをお願いいたします。

(嶋教育長)

お世話になります。よろしく申し上げます。前回の総合教育会議の議事録を見ますと、文科省の初等中等局の職員が、これは1つのモデルになるというふうにして視察にやってきました。そのモデル、何に反応したかという、市長部局の考えていることと、教育委員会がやろうとしている施策が、非常に整合が取れているという意味です。代表的なのが、ローカル&グローバルコミュニケーションの取組みです。こんなことはなかなかないということで視察に来て、いろいろと説明をして、満足して帰り、6ヶ月後に若手の職員をよこして、1ヶ月たつぷりと研修する月があったのですけれども、そんなふうにして、せつかく年に2回か3回かあるこの場で、どういう考え方を市長がお持ちで、教育委員会がどういう考え方を持っていて、どうしようとしているのかということをお互いによってすり合わせる、非常に大切な場だなというふうに思っていますし、かつてはここから新しい施策が展開されたというようなこともありますので、そういう意味でしっかりと議論していきたいと思っております。

せつかくですから、今学校がどんな動きをしているのかということをお互い紹介させていただきますが、昨年5月に就任してからずっと一貫してやっていることは、教育というのは成果が非常に見えにくいものだけれども、その中で見ようとすれば見えてくるものがあって、それは数値化によったり、あるいは、定量化によったりすることです。そのことをしっかりと可視化して、学校の中でこの教育プランは効果があるけれども、これはやめてもいいかもしれないということも、みんなで数字をエビデンスとしながらやっていくことによって、新しい視点も出てくるし、無駄のない学校教育ができるだらうということもずっと言ってきて、ちょっとずつ意識は浸透してきました。11月になってすべての小中学校の校長と面談をした中で、最も市内で学力に課題のある学校の校長がこんなふうに言いました。学テで40%以下の子がいて、二極化が大変だとずっと言ってきたけれども、その40%以下の子をよくよく見ると、30~40%の子と、それから、10%以下の子と全く違う。抱えている問題は全く違うので、そのことが見えてくると、10%以下に対応す

るアプローチや教育内容や教育方法は全く違うし、もうちょっとがんばって背中を押せば山の大きい方に行ける子もやっぱり違うと。そういうものをこれまでは一緒にしてきたというようなニュアンスで報告をしてきましたので、そんなふうにもこれからもやっていきたいなということをおもっております。それが1つです。

2つ目は、市長から先ほどご指摘がありました、コミュニケーション教育については、4月から10の団体が視察に来ています。新聞社もありますし、大学の先生もありますし、他市町の教育委員会もありますし、それから、民間の教育団体もありますし、かなり注目されていると。それで、その中で、やはりここもエビデンスを持つ。子どもにとって本当にどういう効果があるのか、見えているのか、それから、教員にとってどうなのか、そして、保護者にとってどうなのかをしっかりと精緻に分析しながら、次の年度につなげていきたいというふうに考え、そのこともかなり固まりかけているというところです。

それからもう1つは、やはり避けて通れないのが学校の小規模化であります。ご指摘をいただきながら、今年、教育委員会みんなで正面から向かって行って、移動の教育委員会をして、複式を抱える小規模校に入って、子どもの事実や先生の実事や授業の実事を見て、その後、どんなことが課題なのか、また、反対にどんな良さがあるのかということをしつかりと協議しながら、今まとめているところですので、その線上に学校再編があるだろうと思いますから、またその計画とは別に、そんなことをしっかりと地道にこれからも続けていきたいと考えているところです。そんなふうにして、小規模校も回り、私は今年4月からだいたい200の教室を覗いて授業を見ましたが、今ここにきて考えると、どんな子どもの像を目指せばいいのかなというのを改めて考えると、それは2つあって、1つは決意表明できる力です。もう1つは合意形成できる力です。決意表明は“I”ですし、合意形成は“We”になりますから、まずは決意表明ができるだけの知と、それから、判断力と、そして思考力、そんなものを授業やいろんな領域の中でつけて行って、「私は思う」ということが言える、その上に、そのことをわかりながら、理解しながら、じゃあ私たちの意見としてはどうまとめるのかという合意形成の仕方、これは最も今、課題だと思います。そういう視点でいくと、小規模校は圧倒的に不利な環境にあるということもわかってきましたので、そんなことも視点に置きながら、これから教育施策を検討していきたいと思っております。

今日は、2つの課題、専門職大学との連携と、英語遊び教育について、そこはビデオカンファレンスを用意しておりますので、事実に基づきながら皆さんで協議できたらと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

### **【日程3 協議事項】**

(堂垣教育次長)

それでは、3の協議事項に入らせていただきます。内容につきましては、補足説明をするために担当課の職員が出席しておりますので、ご了承ください。まず、専門職大学との連携につきまして、担当から説明をお願いします。資料はNo.1になります。

(谷口大交流課長)

大交流課の谷口と岡と申します。早速ですけれども、お手元の資料に基づきまして、説明をさせていただきます。兵庫県但馬地域における専門職大学について」という資料でございます。

2 ページ目ですけれども、専門職大学というのは、55 年ぶりに国が作る新しい大学制度ということで、大学制度の中の大学というような位置づけになります。ちなみに、下にございますけれども、その前の 1964 年に短期大学が制度化されたということになっているわけです。

次、3 ページでございますけれども、この資料は文部科学省が専門職大学の制度についてまとめております。今回、新たに専門職大学を制度化する背景としましては、ご覧のとおり、経済・社会の状況の変化、それから、高等教育の状況の変化というところで、新しいタイプの人材育成が国として急務だという課題意識でございます。このため、新しい大学を作って、高度な実践力と豊かな創造力を身につけた人材の育成を目指すということでもあります。下段のほうに、少しイメージが書いてありますけれども、大学と専門学校のちょうど中間のところ、創造力と実践力を併せ持ったような人材の育成を目指すということでご理解いただけたらと思います。

次のページにお進みください。具体的に専門職大学という大学が従来の大学と短期大学、それから、専門学校とどこが違うのかということの主なものを抜き出しております。まず、専門学校との違いといたしましては、この専門職大学というのは、専門という言葉はついておりますけれども、いわゆる学校教育法の第 1 条に定められております正式な学校ということで、ちなみに、専門学校は各種学校という分類でございますけれども、専門職大学は大学制度の中の大学という位置づけでございます。それから、専門学校との違いですけれども、この専門職大学を卒業すれば、大学や短大と同様に学士・短期大学士という学位が得られます。この学位というのは、国際的に認められている単位でございます、これによって留学による単位互換が可能になるということでございますが、専門学校ではこういった制度はございません。

それから、従来の大学や短期大学との違いにつきましては、この専門職大学は、専任教員の 4 割以上が勤務経験 5 年以上ある実務家教員と位置づけられておまして、今年度第 1 期として、17 の専門職大学の申請がございましたけれども、その多くが申請を取り下げしておりますが、この実務家教員の確保というところで、かなりハードルが高かったと聞いております。それから主な違い、4 でございますが、卒業単位の 3 割から 4 割を実習科目でということで、これまでの一般的な大学の職業体験、インターンシップというものとは違いまして、卒業単位の 3 割から 4 割、4 年間で 600 時間以上の企業での実習が義務付けられているところが大きな違いでございます。

次は 5 ページです。これは、そういった制度を踏まえた豊岡市の考え方とこれまでの動きを整理いたしております。先ほどから出ておりますけれども、地方創生の推進ということを豊岡市は人口減少対策として捉えておまして、そういった背景と、新たな専門職大学の制度化が始まっているというような情報があつて、この 2 つの流れから、平成 28 年に但馬地域全体として、兵庫県に専門職大学の設置要望を出しました。当初はものづくりと観光ということでしたが、いろいろな議論の中で、ご存知のとおり、文化芸術と観光ということになっております。そういった但馬からの要望を受けまして、平成 30 年、今年の 4 月に兵庫県庁の中に正式に専門職大学準備室専門職大学準備課が設置され、民間の委員の方々に組織する但馬地域専門職大学設立準備委員会が組織されまして、これまでに都合 4 回委員会が開かれ、平成 30 年 11 月 2 日に基本構想が策定され、公表されているところでございます。

こういった県の動きに対します豊岡市の姿勢だとか考え方や、役割分担についてでございますが、まず、大学用地を市として購入し、運営法人に貸与する方針を明らかにしております。旧さとう豊岡店跡地を購入し、大学運営者に無償貸与するという、それから、隣接地にあります市の所有地、旧職業訓練校の跡地でございますけれども、こちらにも建物を除去して、大学運営者



ただのことになっております。また、昨今必要とされています、統計の処理能力であったり、ビッグデータの解析能力というのも共通テーマとなっております。基本的には全学生が海外に留学をし、まだこれは検討中でございますけれども、将来実施されるであろう、国際演劇フェスティバルを実習の場として想定しているところでございます。結果的には、その観光・芸術の2つの分野で、新たに起業したり、新しい事業の展開を図れるような人材を育てていくようなことがコンセプトとして記載されております。

続きまして、9ページをお開きください。今、県が整備をしています、どんな能力を持った専門職を育成するかというテーマでございますけれども、自らポジションをとって、社会に新たな付加価値をもたらすことのできる、事業創造ができるプロフェッショナル人材ということで整備がされております。そういったプロフェッショナル人材に必要な能力として、プロデュース能力を育成していきたいと考えております。

続きまして、10ページです。そういった大学を卒業した学生たちが、どんな現場で活躍するのかということでございますが、当然、観光・芸術の分野もありますけれども、そういった能力を基に行政関係に就職されることも想定されますし、一般企業に就職されることも想定しております。また、企業に属するのではなく、自ら事業を起こす方もたぶんいるのだろうということで、想定しております。

11ページです。これが今日の議題でございまして、専門職大学の地域への貢献ということで、県がまとめております基本構想には、地域貢献として、特別に記述がされており、その記述をそのまま載せておりますけれども、連携をするということだけが決まっていて、具体的に何をするのかということは、まだこの段階では明記されておられません。ただ、先日平田さんが朝来でこの専門職大学の市民説明会をされたときに、地域のものとして、地域の方からどんな関わりができるかをぜひ大学側にどんどん提案してほしいということをおっしゃっていましたので、豊岡の小中学校とどんな連携ができるかというようなものをこちら側から提案するというのもあるのではないかと想像しております。

今後の予定でございますが、今現在、専任の教員の公募が始まっております、来年の10月ぐらいには、建築工事に着手され、設置認可の申請を文科省に行い、再来年、2020年8月ぐらいには、うまくいけば設置が認可され、学生の本格的な募集を行うということで、スケジュールどおりいけば、2021年4月に開学するということになっております。

最後の12ページの上にありますけれども、これはあくまでもイメージでございます。専門職大学を中心に既存の文化芸術施設、それから、新たに計画されている文化芸術施設にいろんな人たちが集まり、活動することによって、文化芸術を中心とした豊岡市の地方創生を推進していくというイメージでございます。最後、13ページでございますけれども、ただいま兵庫県におきまして、専任教員を募集していますので、もしそういう方がいらっしゃれば、ぜひご案内いただいて、ご応募いただきたいと思っております。

(堂垣教育次長)

ありがとうございました。担当課からの説明は以上になります。ご質問・ご意見等がありましたら、どうぞご発言いただきたいと思っております。よろしく申し上げます。特に先ほどありましたように、地域貢献ということで、豊岡市の小学校・中学校・高校との連携等についても、こんなことができるのではないかという意見がありましたら、ご発言いただきたいと思っております。

(飯田委員)

非常にうれしいなというふうに思っています。豊岡市は幸いにいろんな観光資源を持っていますので、そういうものをどのように管理するかということで悩んでいる部分があると思います。しっかりとここで勉強して、継承するような取組みができればというふうに思っています。特に古来伝統の民謡、踊り、そういう伝統芸能などをやる人が今少なくなってきていて、だんだんと廃れていくという現状があるので、こういう分野の中で勉強していく1つの場になるのかなと考えています。地域と一緒にあって、もう一度見直していくのだという取組みができればうれしいと思います。

それと、せっかく豊岡にできるのであれば、今の時点で推し進めていくためには、企業の人と一緒にあって、平田先生だけが一生懸命やっておられるのではなく、企業も行政も地域も学校をみんなでつくっていくのだということで、将来、せっかく大学に入った子が卒業して出ていくのではなく、豊岡に住み続けることができるような筋道を作れるように、ぜひ企業の力がほしいなという気がします。その辺も一緒にあった取組みを進めてもらったらと思います。

(谷口大交流課長)

平田先生のお言葉を借りますと、観光と文化芸術というのはすごく親和性が高いもので、外国では同じ省庁と一緒にあって、同じ目で見えてやっているというご指摘がある中で、日本は、観光は国土交通省ですし、文化芸術は文科省がやっている。ご指摘されたような伝統芸能というのは、保存するという考え方と、それを観光で使うという考え方があるとすると、これまでそういったことを両方見ていける人材がいなかったのだろうと。そういったことを総合的に見られる人材を育てるという意味でも、文化と観光というのをたぶん一緒にされていて、同時に学ぶということが組み立てられているのだと思っています。

(嶋教育長)

僕は、今リベラルアーツという考え方、学問もそうで、これからいろんな職業が出ては消え、出ては消えという中で、1つの職業をずっとやっていくという可能性は少なくなるかもしれないし、今やっている学問が必ず生きるとは限らないので、いろんなものを複合的に組み合わせた可能性が高いですね。教育も。それをリベラルアーツとって、学校教育もそっちのほうにシフトしかけているので、そういう意味では、ものすごく新しい大学の考え方かなと思います。

時間がもったいないので、せっかくですから連携の話です。ずばり入りますけれども、小中学校については、そんなにもものすごく突飛なことを考える必要はなくて、単にコミュニケーション教育をお手伝いしてもらうことができるし、英語教育をお手伝いしてもらうことができるし、それから、例えば中学校の国語の授業が、専門職大学のスタッフとなる先生に授業を見てもらったり、一緒に授業研究をしたりということは当然できるし、平田さんはそれをやりましょうとおっしゃったので、そんなことは教員側としてもすごくいいのかなと思います。

高校の話題もあったのですが、高校については、待っていて小中学校のように来てもらえるのではなく、せっかくあるので、そこへ高校生が出かけていく。しかし、すべての市内の高校でそのようなことはできないので、歩いて5分の豊高と、カリキュラムをけっこう柔軟にできる総合高校をターゲットにして、2つを住み分けして、学問的なことを豊高に委ねる、そして、

実践的・職業的なことを総合高校に委ねるといふふうにしながらかやっていく。具体的には、豊高の場合は、やっとな探究といふのを2、3年前からやり始めて、2月にいつも発表会をしているのですけれども、この探究的な学習の中に自己表現とかパフォーマンスとかを入れながら、テーマとして研究実践して、そこに何か一緒に関与してもらおうといふこともできますし、それから、講座をオープンにされますよね。そこに行かせて、単位取得できるような、そんなこともイメージですけれども考えられるかなと。歩いて行けるわけですから、行って授業を受けて、夏休みの公開講座でもいいけれども、それで単位が取れるといふことも1つできる。

総合のほうは今もせっかくコミュニケーションをやっていますし、入ってもらっているのですが、もうちょっと精査しながら、観光を主眼とした地域活性化の授業をちゃんとコースの中に組んでいって、それで、観光プランとかを共同実践するような場もできるのではないかと思います。イメージとしては、2つをモデルにして、そして、住み分けをしながら出かけていく、そういったことができればと思います。その中で、汎用化できるものがあれば他の高校でもやっていければいいと思いますし、圧倒的に但馬の子は自己表現が下手なので、何か変な格好をしたお兄さんたちがウロウロするだけでも、ものすごく刺激になると思います。そのように今考えています。

(中貝市長)

豊高の発表も非常にシャイで、ポスターセッションをやっとなしゃべるのですけれども、聞こえないですよ。ああいうことは、基本的な技術みたいなところがあっとな、専門職大学ができれば、そういった、実は基本としてすごく大切ところで、滑舌とかも含めて、ある程度関われるのではないかといふ気がします。

今は平田さんが豊岡市の芸術文化参与でもあり、アートセンターのアートディレクターでもありますから、都合よく使い回している、人使いが荒いなど言われながら。大学の学長になってしまわれると、ちょっとそこが難しくなってくるので、それで豊岡市と、最終的には但馬の3市2町ということになると思いますけれども、大学側と委託契約を結んで、一定の費用を市もちゃんと負担をしながら、それを受けて専門職大学は自らのスタッフなり、あるいは、自分のところの施設を使って、高校や小中学校と関わり合っとなっていくといふことが、契約上可能になるといふか、それをしたっとな思っています。

この間、出石高校に行っとなら、校長先生もすごく期待をしておっとな、あそこの教育は芸術で突き抜けていくしかっとなかなといふことをおっとなやっとなして、そうすると、今ががんばっとなしているのが一歩といふか、さらに突き進むことができるのではないかといふことで、すごく期待しています。

高校生が地域社会とつながるに、何か1つ抜けていたんですね。これが、大学生が入ることによって、スーッと一連のものとして、地域社会と高校生がつながっとないきやすくなるかなと、そんな気がします。これからできるのが2年半後、そのときからの委託契約になりますから、それまでに本当に具体的に何をしてもらっとなのかといふことを議論していければと思います。

(深田委員)

今の話と重なることになると思っとなますが、外部人材の活用として、大学の先生、そして、学生さん、この人たちとっとなしっかり連携した授業を作り出すには、特に実習の時間がけっとな多いので、あれだけの時間があればその実習の時間で、大学のゼミのグループのように、各学校にもっとな入り込んで、中学校でも小学校でも、コミュニケーション教育と英語教育とを一緒にしたっとなような、

今、教育委員会も豊岡市も目指している、将来を見越したグローバルな人材をより体験的に、経験的に作っていく絶好の機会ではないかと思います。

そのときに、今もいろんな意味で学校が外部人材をちゃんと入れながらやっていますけれども、その中でいろんな課題もあるだろうと思いますので、しっかりと教育成果をお互いに検証し合いながら、お互いに対等な立場で意見を交換できるような、そういうシステム作りだとか、どちらかという学校がどんなことを外部人材にお願いしたいのかという、依頼の目的の明確性も問題になってくるだろうと思います。しっかりと外部人材と連携した授業を大きく活用していくというのは、将来的に小学校も中学校もコミュニティスクールというものを考えていく中においても、すごくいい試金石になるのではないかと感じます。

ただ1つ心配なことは、先ほど言われたように、専門職大学は、たくさん申請しましたよね。やめたところもたくさんありますよね。今度開学するのは1校ぐらいですかね。高知だけだったと思います。そんなことを考えたら、もちろん先のことですから、研究をどんどん進められて、そういうことが起こらないように手だてはされていくのだろうと思いますけれども、それだけに期待が大きい分、綿密に県との連携の中で、但馬全体、先ほど飯田委員からも話が出ましたけれども、企業も含めて但馬全体の中でしっかりと考えていくということも1つの課題かなと思います。

(佐伯委員)

感想になりますが、この専門職大学ができるのはすごくいいことだと思います。この豊岡には、一応、大学は豊岡短大がありますけれども、あまり接点がありません。でも、これができて、小中高と何か連携してもらうことができる、例えば小学生だったら夏休みのサマースクールがあって、そういうもので一緒にコミュニケーションの授業ができるとか、そういう関わりができると、大学生ってこういうものかというのが小学生のときから見るができる。突然都会に出て大学生になるのではなく、ちょっと想像した世界ができるのではないかと思います。

また、想像ですけども、この専門職大学に外から入ってこられる方、都会から専門職大学に来た人が、田舎ならではの働き方というか、良いところや、活躍の場があるということを学んでいただいて、そのまま豊岡に定住してもらえようような取組みにもっていったら、人口の増加にもつながるのではないかと少し期待しています。12ページにこれからの推進のイメージがありますが、観光もですが、アート・芸術ですし、手前味噌ですけどもFMジャングルも一応アートみたいな感じで、そこまでの技量がないじゃないかと言われてたらそれまでですが、一応アートですし、但馬で唯一のコミュニティFMですし、そういうところで、しゃべり手とかDJとかを経験しながら自分を表現する、そういうことを学べる場の1つとして使っていただきたいし、また、学んで卒業された方がDJとして活躍していただくとか、そういう場が連携できたら有り難いと思いますので、よろしくお願ひしたいと思います。

(中貝市長)

学生の作ったドラマの原稿を放送したらいいね。

(佐伯委員)

そうですね。そういう授業とかも取り入れていただきたいですね。表現ということでは同じ

だと思えます。

(向井委員)

私もとてもいいことだと思っています。去年、平田オリザさんの地方創生の講演会を聴かせていただきましたが、そのときに平田先生のワークショップに何回か通ったという日高高校の生徒が、「そういう方向へ進みたいけれども地元では残れないので、但馬を出ていく。もう少し早くできていれば残れたのに」と言っていたことを覚えています。大学ができれば、そういう子たちが但馬に残って就職してくれたり、また、都会の子が豊岡の大学に来てくれたりして、若い人がどんどん増えてくれるので、うれしく思います。最近、私の住む竹野でも「但馬がいい」「竹野がいい」と言って、都会から竹野に移り住んでいる方も何人かおられます。若い人たちには、田舎でしか味わえない良さを感じていただいて、若者の定住がうまく進んでいくことを期待しています。

また、豊岡市の小中学校もコミュニケーションを勉強しているので、それが継続して豊岡の大学で専門的に学ぶということは夢のようなことだとうれしく思っています。

(佐伯委員)

専門職大学という名前ですが、仮称だからと言われましたが、いろいろな方から、「専門学校なの？」とか、「大学の卒業資格はもらえるの？」と聞かれて、4ページの資料を見ると大学だということがわかるのですが、いちいち説明しないとわからない名前になっているので、名前を聞いただけで、大学だとか、大学と同等だということがわかるような名称になったら、さらにいいのではないかと思います。

(嶋教育長)

英語で言ったらどんなふうになりますか。

(佐伯委員)

「専門職」とついているから、そこが…。

(谷口大交流課長)

そこは、我々も最初「専門職」というと職人みたいなイメージがありましたが、たぶんプロフェッショナルという意味だと思うのですが、大学名称に専門職大学という単語は入れないといけません。

(佐伯委員)

「専門職」というのは入れないといけない。

(谷口大交流課長)

そうです。その前は自由なのですが。〇〇専門職大学。

(佐伯委員)

英語にしても駄目。

(谷口大交流課長)

英語にしたらプロフェッショナルカレッジ。

(深田委員)

やっぱりカレッジだな。

(佐伯委員)

それでいいじゃないですか。そのほうがいいですよ。

(中貝市長)

名前はちょっと簡潔にしないとイケないね。

(佐伯委員)

そういう意見が多いのではないですか。

(堂垣教育次長)

他にいかがでしょうか。まだ開学までにしばらく時間がありますので。

(谷口大交流課長)

1つお知らせを。後ほど資料をお持ちしますが、プレカレッジという大学のプレ授業として位置づけられたのですけれども、この12月16日に浜坂で平田さんが「演劇的手法を用いたコミュニケーション能力の形成」というような講演会であったり、3月2日、但馬長寿の郷で、宮台真司さんが「21世紀の新しい大学像」ということで講演をされますので、ぜひお越しただけたらと思います。後ほど資料をお持ちしますので、よろしくお願ひします。

(堂垣教育次長)

ありがとうございます。開学までにまだ時間がありますので、教育委員会としましても、いい連携を取ることがありましたら、どんどん大学とも連携させていただいて、提案していきたいというふうに考えています。

それでは次に、英語遊び保育・英語教育について、担当課より説明をお願いしたいと思います。資料No.2になります。

(宮本こども育成課長)

こども育成課から英語遊び保育について、資料に添って説明させていただきます。まず、資料の1ページ、英語遊び保育事業の位置づけでございますが、2にありますように、最終目標を「ふるさとに学び、ふるさとを英語で語る、児童生徒の育成」といたしまして、0～15歳を一体的に捉えた豊岡市英語教育全体を踏まえる中で、幼児期においては、「英語大好き、もっとしたい」という、積極的な気持ちを育むということにしております。英語を通して、英語に慣れ親しむという内容で進めております。

資料の3ページ、事業の取組内容について記載させていただいておりますが、皆さんご存知のように、この英語遊び保育というのは、英語の勉強ではなく、英語に親しみ、楽しもうとする気持ちを育むという取組みとしておりまして、歌やゲーム、絵本の読み聞かせなど、指導員とのやりとりを通して英語に慣れ親しみ、英語って楽しいなと感じてもらうことを大切にしたいと考えております。この事業を通しまして、子どもたちにはまず外国の言葉や文化に興味を持ったり、それから2番目に、喜んで人と関わろうとする子に、それから、自己肯定感を持てる子に、このような姿を期待するとともに、世界の人々ともコミュニケーションを図ろうとする気持ちや、外国の文化に興味を持とうとする気持ちのベースを養うことを目指しております。

4ページをご覧ください。皆様、英語遊び保育の授業には見学に行っていたいただいていると思いますけれども、巡回訪問の流れです。「Hello!」で始まりまして、「体を動かそう」、それから「英語で言ってみよう」、「ゲームで遊ぼう」、歌や手遊び、そして、最後に静かに絵本の読み聞かせを行い、いちばん最後には「Good bye! see you!」と言って、1人1人が指導員とタッチをして終わるといったような、基本的に同じルーティーンで構成しております。内容のことにつきましては、1、2回毎に新しいトピックに変えて進めているところでございます。

5ページをご覧ください。こちらのほうは英語遊び保育事業に関わるアンケート調査の結果といたしまして、どんな声が上がっているかということを保育者から、それから、4・5歳児のアンケートの調査結果を記載させていただいております。まず、保育者からの声といたしましては、「英語遊びの日をととても楽しみにしている」「喜んで参加し、笑顔がたくさん見られる」ということや、「指導員の先生にハイタッチして、“good!”と言ってもらえることがうれしくて、大きな声で発言できるようになってきた」といったような意見を頂いておりますし、「All Englishに対して、抵抗なくしっかりと聞こうとする姿勢が見られる」とか、「子どもたちの発音がとてもきれいです」ということもお聞きしております。また、こちらには記載しておりませんが、マリンワールドへ遠足に出かけた子どもたちが、外国の方に「What's your name?」と聞かれた。その子どもたちが自然に返事をしていったというようなお話も聞いております。

それから、保護者の方からは、「あんなに生き活きと参加しているとは思わず、意外な姿を見られました」という感想もあったと書いておりますが、その他、この間五荘奈佐幼稚園に行かせていただいたときにも「子どもたちがとても英語に慣れている。その様子を見てびっくりした」「皆、とても興味を持っている。良い授業だなと思いました」「とてもすてきな取組みですね」といったような声も聞きました。「All Englishなので、みんな先生に集中して、よく考えている姿も見られた」といったような意見も聞いております。

4・5歳児対象のアンケートの調査結果を2に記載させていただいております。なにぶん小さいお子さんですので、ペーパーでアンケート調査をすることができませんので、保育者の方から言葉で質問をしていただいて、子どもたちにはにっこり笑っているマークと、ちょっと悲しんでいる顔のマークを見せて、自分の気持ちのほうに色を塗ってくださいということでアンケート調査をさせていただきました。その結果、平成29年度の集計結果ですけれども、「英語遊びは楽しかったですか」という問いに対して、全体で96.6%の子が「楽しかった」に色を付けております。

「英語は好きですか」という問いに対しましても、4・5歳全体で93.2%の子が、また、「英語をもっと話してみたいですか」という問いについても90.2%の子どもたちが「はい」に色を塗ってくれています。

保育者の方からも「日々の保育の中で英語遊びを取り入れたいので、職員向けの研修会を実施

してほしい」というような希望もありましたので、昨年度から英語遊びの指導員による研修会を年に1回ずつ、豊岡会場と日高会場の2会場で実施させていただいて、先生方にも歌や手遊び、ゲームなどをいろいろと教えていただいて、日々の保育に取り入れていただいているところです。引き続き、無理のない範囲で、英語遊び事業の定着をさせていきたいと考えております。

(堂垣教育次長)

引き続きまして、小学校のALTの配置、及び、中学校のイングリッシュ サマーキャンプにつきまして、担当課の説明をお願いします。

(寺坂こども教育課主幹兼指導主事)

こども教育課、寺坂です。資料はNo.3の両面刷りで、小学校ALT配置についてです。まず、ALT配置に関する評価ですが、昨年度1月に小学校の3・4年生、さらに、小学校の先生方を対象にアンケートを実施しております。「英語の授業が楽しい」と思う児童の割合は、95.4%、「ALTともっと話したい」と思う児童の割合は、88.8%、「外国の人と友だちになり、外国のことをもっと知りたい」と思う児童の割合が、75.7%となっています。先生方からは、「児童がALTとのふれあい・授業を楽しみにし、ALTの発音を真似して大きな声で表現している」「積極的に英語でコミュニケーションをとろうとするようになってきている」といった回答がありました。保護者からは、「児童がALTとの授業のことを家でよく話をしてくれる。よく話題になっている」といった感想がございました。

課題としましては、やはり先生方の、「英語の指導力」さらに、「ALTの効果的な活用」が挙げられます。いちばん下、参考として付けておりますけれども、株式会社イーオンが英語力向上のために、英会話教室に通う小学校の先生方を対象に、アンケートを実施しております。この中で、自身のスキルアップのために費やせる時間が、1日あたり0～1時間と答えた先生が90%、1週間にしても41%、また、授業でのクラスルーム・イングリッシュ、つまり自身の英語力に課題を感じている先生が54%という統計がございます。

今後は、国県が実施しますリーダー育成研修等への参加、各校への伝達、授業公開、実践交流の活性化を図るなど、ALTの効果的な活用と指導力向上を目指して、取り組みを進めてまいります。

裏面をご覧ください。今年の夏休み、2回目となりますサマースクールを小学校1年生対象に実施いたしました。期日・会場は資料にあるとおりで、一部開催を中止した日もございましたが、170名、市内の23.9%の児童が参加いたしました。保護者も多数参加、見学していただきましたが、非常に肯定的な感想がほとんどで、ALTが非常に熱心に指導にあたっていたことによりまして、学校での授業に対しても安心感・期待感が大きくなったというようなご意見を多数いただきました。以上で小学校のALT配置について終わります。

続きまして、資料No.4、イングリッシュ サマーキャンプ中学校3年生です。資料にありますように、3日間、今年度新規事業で中学3年生、28名の参加により実施いたしました。指導は市内のALTがあたり、スーパーバイザーとして1名、他地区のALTが指導いたしました。参加した全生徒が、「参加する前と後で気持ちに変化があった」というふうに回答し、英語でコミュニケーションを図ること、英語を学ぶことについて、肯定的に捉えておりました。3日間のプログラムの参考資料として、1枚付けております。また、お目通しください。

内容としましては、段階的に捉えてまいりまして、学校で学んでいること、その後、世界で起

こっている様々な問題、その後、ふるさと豊岡の未来、自分の将来のことを考え、最終日に英語でプレゼンテーションをするといった流れで取組みを行いました。

課題としまして、今回は28名、6グループで実際、1人1人の活動が非常に多く、All Englishで行うことができたのですが、募集人数をさらに多く設定しようとする場合に、指導者数であったり内容について、さらに検討が必要ではないかということ、3日間英語漬けにできるために、例えば食事の場面ですとか、実際の生活場面をしながらの英語活動の開発をしていくこと、さらに学校行事の関連性と参加生徒の達成度について、調査研究を進めていくということが挙げられます。

(堂垣教育次長)

説明は以上になります。それではここで、園と学校で英語遊び保育と英語教育をさせていただいているところのビデオがございますので、そちらをご覧くださいと思います。始めに、英語遊び保育からお願いしたいと思います。

(仲義こども育成課幼児教育保育指導係長)

いちばん始めに見ていただくのは、平成28年9月ぐらいになりますが、八代保育園での英語遊びになります。試行的に始まった段階で、本当に八代の子どもたちもまだ数回目というところですよ。

次に、違う園になるのですが、平成30年11月に日高幼稚園でやっているもの、平成29年度から本格的にやっているもので、かなり回数を重ねています。これから見ていただくのが、10回目の場面になるのですが、違った園、違った子どもたちですが、子どもたちがどんな、口を大きく動かしてしゃべろうとしているか、歌っているか、あと、子どもたちの表情はどうかなど、そういうのを見ていただきたいと思っています。日高幼稚園の子どもたちが、先ほど課長からあったルーティーンで取り組んでいるのですが、子どもがどういった姿勢というか、態度で取り組んでいるかということをご覧くださいと思います。

#### 【英語遊び保育ビデオ上映】

(仲義こども育成課幼児教育保育指導係長)

英語を使った遊びなのですが、ゲッシングゲームといって、指導員が箱の中にパンプキンかポテトの絵を入れています、これどっちだと言って、子どもたちが推測して当てるゲームです。

これは子どもたちが大好きな歌を歌っている場面です。子どもたち指を動かすのが精一杯です。

最後の最後は、指導員とタッチをして、あいさつして帰るわけですよ。この動画の中で全員がSee you!と言っていて、中には、ちょっと声が小さい子もいるのですが、1人1人の子どもたちが最後ああいうふうに、See you!というふうにして、ハイタッチして帰るという場面でした。

(堂垣教育次長)

続きまして、小学校のALTの授業をお願いします。

### 【小学校 ALT 授業ビデオ上映】

(寺坂こども教育課主幹兼指導主事)

小学校の方は、昨年、豊岡小学校の1年生を対象に、1学期から順番に月を追う毎に定点で撮影したものでございます。また、途中で説明させていただきますので、よろしくお願いします。

最初の段階では、ALTの言うことをそのまま返すという段階です。ただ、なかなか自分で言葉を生み出せないというレベルです。見よう見まねでそのまま返しています。

11月になります。同じ子たちです。この頃から、それぞれの受け答えができるようになり始めております。違うことを言っています。このあたりもジェスチャーと単語のミックス、体を動かして表現しております。

3学期になりますと、友だちとのコミュニケーションがとれるようになってまいります。こういう場面では、ある一定の文章で会話ができるようになっていきます。以上が小学校の様子でした。

(堂垣教育次長)

引き続きまして、中学校のイングリッシュ サマーキャンプについてです。

(寺坂こども教育課主幹兼指導主事)

キャンプ3日目、最終日の午後、6グループに分かれたプレゼンテーションでございますが、全員英語で行っております。広い教室ですので、若干音が聞き取りにくい部分があるかも知れませんが、よろしくお願いします。テーマは10年後の豊岡を大テーマとしまして、環境面、産業面、それから、大学のこともについても話を入れております。そのことをご覧いただけたらと思います。

### 【イングリッシュ サマーキャンプビデオ上映】

こちらがALTになります。指導者です。まず、環境面の話をしています。チラチラ見えていますけれども、手元には資料を持っておりません。基本的には覚えてしゃべろうというふうにしております。今度、大学を作ったらいいのではないかというような話をしております。以上でございます。

(堂垣教育次長)

映像は以上になります。それぞれ、ご質問とご意見等ありましたらお願いします。

(中貝市長)

幼稚園・保育園で、英語遊びをやっていた最初の子どもたちは、今何年生になっていますか。

(仲義こども育成課幼児教育保育指導係長)

27年度から試行的に始まっているのですが、そのときの5歳児が今の小学3年生になります。

(中貝市長)

だったら全園展開したのが去年か。

(仲義こども育成課幼児教育保育指導係長)

29年度からです。

(中貝市長)

まだ小学校に上がっていない。高校でどんなインパクトがありますかね。この子たちが高校に入ったときに。

(深田委員)

高校の授業のやり方を変えざるを得ないと思います。今はまだ文法などを中心にしながら、受験対策の部分もかなりあると思いますけれども、2020年の大きな曲がり角がありますので、それを受けて、自分がどんな思考力を持ちながら、言葉を変えれば、自分自身の考え方を自分のコミュニケーション能力を使いながら、どう表現して、相手との協同性をつけていくかということが問われるようになるわけですから、英語も1つのツールという考え方をより鮮明に出さないといけないと思います。より自分が体験したことを、英語を使って相手と会話をしなければならないわけですので、今までのような教科書を中心としたような英語のやり方ではなく、もっと体験的な英語の教育をやっていかなければならないような教育になっていくと思います。

9月11日だったと思いますが、サンテレビのニュースで、城崎小学校で平田先生が、ロボットのコミュニ先生を使いながらやられた授業が出ていました。その中で、この授業のキーワードは何かといたら、「多様性と合意形成」だということを言われていました。そういう意味では高校生も、多様性は、いろいろな経験の中で考えていかなければならないと思うし、もう1つの合意形成の作り方のところが苦手だと思う。今の高校生はどうかわかりませんが、以前の但馬の子どもたちは、それがとても苦手でした。対話による合意形成ができるようになるには、自分の言葉で自分のことを語れたり、自分の周りのことを語れたり、そして、自分が求めているもの、相手が求めているもの、その中でお互いにどういうふうなものを協同性の中で作っていけるのかということが理解できるようになっていくのではないかと思います。そういう意味では、英語教育というのは全市的にやってまだ1年ですが、まだまだ成果は今のところ目に見えた指標みたいなものはないのですが、そのうちに必ず、特に高校で言えば、成果についての指標形成のようなものが求められるようになると思います。今でも高校を卒業する段階で、英検の準2級か2級は5割以上にしなさいとありますけれども、それと同じように、各学校においてもそれに近いような、具体的に目標設定を出していかなければ、学校としての価値が認められないだろうと思います。教育長が専門職大学のことについて話をされていましたように、豊岡高校、豊岡総合高校のお互いの強みを活かした指標形成をされて、それが自分の進路にもつながり成果となる。高校はそのような変わり方をしていくのではないかと思います。その素地を小中の中に作っていくということになると、県下でも三木市と豊岡市だけですけれども、0歳から15歳までを見通した英語教育の実施や本市の英語をツールとしたコミュニケーション教育は大いに期待されます。その意味では、豊岡の高校生はこれがものすごく武器になるのではないかと勝手に思っています。

(中貝市長)

子どもたちのいちばん長い子は3年生でしたか、英語に関わることでなくて、コミュニケーション能力だとか、対人関係の特に表現みたいところで何か変わってきたことはありますか。非常にオーバーアクションで、ジェスチャーでやっていますよね。実にオープンにするということをお求めているわけですよね。そういう表現をすることを英語遊びの中で。今の普通に日本語で話している幼稚園や保育園の状況はよくわからないのですが、同じようなことではそこは一緒なのでしょうけれども、もしあそこまでオープンではないとすると、この英語遊び自体が何か子どもたちに変化をもたらすような気がするのですが、どうでしょうか。

(嶋教育長)

たぶん、英語遊びとか、英語遊び保育とかいうステージではできるけれども、実生活の中まで汎用しているかということ、たぶんこんなことをして会話をする子は…。もうちょっと時間がかかるのかなと思いますが、そんなステージでもこんなふうになればいいんだとか、わかり合えるんだという経験を積むことが必要かなと思います。もう少し時間がかかります。中にはいるかな。そういう子も。

(深田委員)

今の動画を観ていてもそうですが、僕らの時代とは違って、子どもたちは素直に外国というものを感じとることは十分にできていると思います。まず、英語遊びなどで英語に対する嫌悪感を持たせないという意味では、確実に成果は上がっています。あとこれが小学校へどうつなげて、ましてや中学校になると、今度は明確に、指導要領の中にも文法ということが出てくるので、そのあたりと連動しながら自分の身につけていくのかということだと思います。英語で話をするのと、英語でお互いに会話することは違いますから、自分の持っている原稿を英語で話すのではなく、お互いに対面して英語で会話ができるようになると語学力が、高校生の1つの目的だろうと思います。そのための基礎の部分が今、豊岡では小学校の低学年からの英語遊びであり、3・4年生の中学年が週1時間程度の外国語、高学年では週2時間、年70時間の教科としての外国語ということになっていくわけで、そういう段階が踏まれていく中のいちばん最初の部分としては、私はあの画を見ているだけでも十分に成果が上がっていると思います。それが最終的にイングリッシュ サマーキャンプでの話の中で、今日の画を見ていたらまだ固いと思いますけれども、自分の言葉で10年後の豊岡のことをもっともっとお互いに会話をしながら、発表ではなく会話しながら進めていくことができるような子ができるのではないかと期待しています。

(嶋教育長)

大学入試問題が変わらなると、英文法も変わらないと思うし、4領域だって、話すこと・聞くこと・書くこと・読むことの中で、3つはできているけれども、話すことというのはものすごく日本の教育は遅れていますので、入試改革が変わってくると、自ずと高校の授業が変わってきますので、僕がさっき話しましたが、専門職大学というのはそういう意味ですごく魅力的で、今の英語は学校知ですから、学校の中で通用するけれども、城崎に出かけて行ってインバウンドの客と話をするかということ、なかなかそんなことはできないので、専門職大学の講義がきたら、それはそれで実の場がありますので、魅力的だなと思います。

(中貝市長)

平田さんは1学年20人ぐらいを外国人にしたいとおっしゃっています。ということは、4学年で80人でしょう。80人とか100人とか、その講師陣も外国人が来ますよね。その人数がこのまちなかに住むことになるだろうと。だから、露出がぐっと増えるわけです。それは面白いことになるでしょうね。地方創生の担当はいないけれども、豊岡の教育の売りって、こういうところだというのは、今こうやって映像では見せてもらいましたが、これは外に出していますか。教育委員会というのは、基本的に、今豊岡にいる子どもたちをどのように教育するかという観点しかないもので、それを外に売り込む必要は特にはない。もちろん、知られば視察にも来て、大交流ということになって、それは比較的やってもらっているのでしょうかけれども、外から人を呼び込もうとするときに、もしこれが売りであるとするならば、むしろそのこと自体、積極的に出したほうがいいのではないかと。いくつかあると思うのです。豊岡の教育の特徴であって、こんなにいいですよ、だから教育を受けるなら豊岡に来い、みたいなね。そこは地方創生のUIターンの仕事か。UIターンのところと相談をして、一度考えてみてください。ただ子どもたちの肖像権のことがあるので、そこはクリアする必要があるでしょうけれども。いっぱいここに書いてあるよりも、たぶん映像を見せると一発だと思います。その中で、運動遊びもそうでしょうし、例えば小学校の芝生化がまだ済んでいないところはあるけれども、ほぼ芝生化されていることであるとか、いくつか特徴がありますよね。それを豊岡の特色というか、強みとして外に打ち出していくという、そうすることによってUIターンを増やしていくみたいなことが考えられると思います。

(深田委員)

本当に強みです。僕はそう思っています。0歳から15歳までの一貫した教育の中で、豊岡の子どもを育てていく、その1つの柱の中にこのコミュニケーションがあります。将来を見据えている教育の方向性というのは、間違いないのですから、それを実際にこういう成果がちょっとでも表れているということ、今言われるようにどこかで喧伝していくという部分もあると思います。

(中貝市長)

演劇なんかもそうですね。そういうものをもっとアピールしたらいいと思います。課題は何がありますか。英語遊びとか、あるいは、小学校、ALTを入れてはいますけれども。

(深田委員)

僕が感じるのは、委員会の中で話をしてもそうですが、ALTの先生を配置しているが、そのALTに対して学校や先生たちが、いろいろな意味でもっと遠慮なく、いろんなことをしっかりと、それこそコミュニケーションをもって、「この授業ではこういうことを期待していて、こういうことについてどう思うか」をもっとしていかなければ、ALTの質というものがお互いに向上しないような気がします。ALTが入るのと入らないのでは、特に小学校の低学年の授業の中では、体験的な教育という面でいうと、すごく重要なことで違ってくると思っています。

(嶋教育長)

今、教育はいつも言っていますように、カリキュラムが本当に肥満化して、それで教員の数はあまり増えない。教員免許を持っている者も、まさか英語が小学校に入るなんて思わずに小学教

員免許を持っていますから、なかなか追いつかないので、とにかく ALT に負うところは大きいです。有能な ALT が入ってくれているから、それはすごく豊岡は助かっているけれども、本当に下世話な話ですけれども、打ち合わせをする時間がない。本当に日本語もできて、いい ALT とちょっと休み時間に打ち合わせをして授業をするというのが日常茶飯事になっているので、そういうような打ち合わせをする時間をちゃんと取れるようなマネジメントというか、働き方改革とか、そんなことが学校から出てきていますので、一生懸命、今歯を食いしばってやっているところなので、楽しそうな顔はしていますけれども、そういうバタバタしているところがあります。国がいずれは、また JET になるかもしれないですが、ALT の配置は必ず数年後にしてくると思います。今のところ、聞いていますけれども、まだ動きがないので、それまではなんとかちよっとお金の話になってしまいますが、ALT をなんとか助けていただいて、学校の職員があまり負担感なくできるということが、本当に緊急の課題かなと思います。

(中貝市長)

今の打ち合わせをする時間がないというのは、日本の側の教員の問題？

(嶋教育長)

日本の側の教員の問題です。学校業務の問題です。

(中貝市長)

JET プログラムの ALT だと、いい悪い、当たり外れの差が大きいでしょけどね。今のところ、小学校のほうは大丈夫？質的な当たり外れというのは。それがないだろうからということで、わざわざ高いお金を出して雇っているよね。

(寺坂こども教育課主幹兼指導主事)

はい。こちらからもかなりお願いをしていることをクリアしていただいていますし、その状況に応じて研修をしていただいておりますので、その都度、現場の声を必ず反映していただいております。

(嶋教育長)

トレーナーは年に2回ぐらい回ってきて、「どうだ」と言って、先生とか教師に対して、悪かったらちゃんと指導してくれている。JET はそれがありませんね。出しっぱなしですね。中にはいい JET もいることはありますが、割合は少ない。

(寺坂こども教育課主幹兼指導主事)

日本の永住を見越して入ってくる JET もいますので、いろんなパターンがございます。

(飯田委員)

先日、学校訪問をしたときに、教員と子どもではなく、ALT の先生と子どもたちがグラウンドで走り回っている。生の外国の人とやっている。そこで、日本語で会話しているのでしょうかけれども、その子には肌で感じる、五感で感じる外国の部分というのがあって、あれはいい風景だなと

思いました。そういういろんなところで教えるという感覚ではなく、自然と入ってくるというか、「Oh!」「Yeah!」とか、片言みたいなものでも吸収する子どもたちがいる、子どもたちの吸収力というのは、とても大事だなと思いました。

(佐伯委員)

下の子が小学校3年生で、英語をずっとさせていただいていたのですが、最近、私が晩ごはんの味見をしてと頼むと、「Good job!」と言ってくれました。大きなジェスチャーはしてくれませんが。先日、養父の建屋小学校、英語に特化した特認校ですが、そこに女性教育委員の研修で行かせていただきました。豊岡の最終目標が「ふるさとに学び、ふるさとを英語で語る児童生徒の育成」ということですが、私はこれを見たときに、正直「ほんまかいな」と、そんなみんながペラペラとふるさとについて語れるのかなと思っていましたが、そこに行ったときに、ALTの先生が配置されていて、常にコミュニケーションをとっていて、休み時間にもずっとコミュニケーションをとっていました。自分の夢を発表するという授業があって、男の子がすごく流暢に自分はダンサーになりたいんだということを、ジェスチャーを交えながら、もちろん全部暗記で皆さんに伝えているし、すごく伝わってくるようなスピーチだったので、やはりALTの先生とこういうふうに常に接点を持っているということは、こういう成長があるのだということを見させていただきました。豊岡は学校の数が多いですから、ALTの先生を全部に置いてくれとは言いませんけれども、今いらっしゃる数をできれば増やしていただきたいですけれども、それが無理なら現状維持はやっていただきたい、せつかく子どもたちが少しずつ、やはり積み重ねだと思しますので、ここはやっていただきたいと強く思います。

(中貝市長)

ちなみに建屋は、それで児童は増えているのですか？

(佐伯委員)

まだ今年が1年目で、残念ながら2年生と3年生は複式です。でも、今年からまた、これからです。3人ですか。特認として入ってこられたのは3名で、今年はさらにとということで、やられるみたいです。

(嶋教育長)

入ってくるといっても、市内からの移住です。

(佐伯委員)

いえ、横浜からも。

(向井委員)

2人は京阪神から。

(嶋教育長)

それは純粹に転校してきたのではない？

(佐伯委員)

おじいちゃんとおばあちゃんの家があるので。

(向井委員)

住所を変更して。

(教育長)

住所を変更したらそれは豊岡でもできるのだけれども、特認校制度って、あそこがやっているのは、市内での移動。

(向井委員)

それは1人でした。

(佐伯委員)

その代わり、市からのスクールバスの送迎がすごく手厚い感じです。山奥ですから、それがないと無理かなと思います。でも、英語に関してはすごかったです。

(向井委員)

その ALT は大変すばらしい方でした。黒人の方ですが、人数が少ないので子どもたちとは常に密接に関わっておられて、子どもは「なんでそんなに黒いの?」「なんで髪の毛はちりちりなの?」「なんで手の中は真っ白なの?」など大人がドキッとするようなことを聞くそうです。そういう人種が違う方と小さいころから触れられること、交流できることは良いことだと思います。それから、ALT の方がまちで何が悲しいかと言ったら、声も掛けずに白い目で「なんであの人は黒いの?」というような目で見られることがいちばん辛とおっしゃっていたそうです。小さい頃から国籍や人種が違う人と交流できるということは、英語教育だけでなく人権教育の意味でもとてもよいことだと思います。豊岡の子どもたちも、小さいときから外国の人と身近に接する機会がもっと増えればいいなと思いました。

(堂垣教育次長)

他にご意見はございませんか。教育委員さんの総意としましては、ALT の今の人数の維持をということでした。

(向井委員)

できれば増員です。

(佐伯委員)

最低は維持で、よろしくお願いします。

(堂垣教育次長)

ありがとうございます。これにつきまして、ご意見もないようですので、これで協議事項は終わらせていただきたいと思います。

#### [日程4 その他]

その他のほうに入りますが、せっかくの機会ですので、何か他に、ご意見等ございましたら、ご発言いただければと思いますがいかがでしょうか。森田副市長よろしいでしょうか。初めて見られた映像の感想でもどうでしょうか。

(森田副市長)

なかなかやはり、小さい頃から関わるといいんだろうなと思います。ただ、最終的なご要望につきましては、現状維持ということで。

財源さえ確保できれば JET よりもいいだろうなと思いますけれども、昔の JET で来られた皆さん、本当に地域に入って、地域と交流もされていまして、よかったなという思いがあるから、最近の話を聞くと、質が落ちたのかなという思いがありますので、そのあたりを改善できればいいかなと思います。

でも、JET は財源がちゃんとついていきますので、ゼロにはできないのかなと思ったりして、そこは何かいい方法があればというふうに思いますけれども、すぐには難しいだろうなと思います。

(堂垣教育次長)

ありがとうございます。

(中貝市長)

専門職大学で、いろんな人たちが来て、ものによっては英語でやるものも出てくるでしょう。それと、何よりも留学生に対して日本語をちゃんと教えるということ。All English でやるというふうな話なら、いったい何をしに来るんだと。やっぱり日本に来た以上は、日本の文化だとか、日本の言葉をちゃんと学んで帰ってもらわないといけないということがあって、それこそ、筑波大の附属高校の先生みたいな人を引っばろうとしているんです。それは外国人にちゃんと日本語を教えて、日本の文化を学んでもらうということがあったので、そこはすごくしっかりしていると思います。

(深田委員)

1年生が基本的に寮に入るというのは、大変良いと思います。先ほどの話ではないですが、半分ぐらいが外国の学生ということになると、一層寮生活が重要だと思っています。豊岡の子だけではなく日本人の学生が1年間一緒に生活をしていくということは、ものの見方そのものがかなり変わってくるし、先ほどの向井委員の話ではないですが、生活の中でお互いを感じる中で、やはり無視できない部分で当たることもあるだろうけれども、理解し合うことができることも多くあるだろうから、あれはすごいなと思う。ああいうことが高校でもできないかなと思ったりしますが。今、家庭教育がいろいろな意味で大変なときですから、それを全部学校で担うというのは無理なだけに、ああいうふうな仕掛けが必要だと思っています。

(中貝市長)

寮は平田オリザさんの非常に強い意向でできることになりました。1つは、1人っ子が増えてきている。複数で暮らすということがなかなか身に付いていない。なので、そのところを変えたいというのが1つです。それから、留学生が入ってきますから、留学生と一緒に部屋にすることによって、否応なしに日本語で学び合っていく。やはり英語はマストなので、その英語を身につけるところを寮の中でさせようという、そういう狙いもあって全寮制なのです。今の予定では100人ぐらいの規模のものができますけどね。あと2年生になると出ていくので、豊岡にワンルームマンションがなくて、学生用を誰かつくってくれないかな。劇場もできますしね、大学の中に。劇場ができるので、今よりもはるかにああいう世界に触れ合う機会が増えてくると思います。

(深田委員)

必要性があるということがわかれば、下宿屋さんも増えてくると思いますが。

(中貝市長)

あと、あの大学の特色というのは、来年から第1回をやりませんが、国際演劇祭の手伝いをするということが単位になる。実践の中で、そういうイベントの運営のノウハウを身につけるということがありますね。たぶん、こんなことをやっている大学はないだろうと思います。学生は個人レベルでも、ボランティアをやることはあるのでしょうけれども、大学の授業として、演劇祭の運営に関わるというのは、たぶん売りだと思えます。それで、本当はもっと先だったのが、大学ができる前にやってくれという話があって、県の専門職大学の担当の方から。つまり、こういうことがすでにあるので、この演劇祭の中に学生は入りますと言うと、文科省は「なるほど、そうか」とわかると思う。これからやりますと言うと、本当か嘘かわからないという、そういうことなので、急遽することになったのです。これができるのと高校生も中に入ってもらったらいいいですね。やるのはたぶん9月の始めですから、夏休み中ぐらいに関わってもらおう。あとは9月に入ってしまうけど、高校は9月1日から学校？

(深田委員)

早くなっています。8月の第3週ぐらいからも増えています。

(中貝市長)

実際、9月の演劇祭の土日の分ぐらいだけでも最後まで関わると。それまでも夏休みは全部関われますね。そのときに、大学生や大学の先生たちや、あるいは、劇団の人たちと関わることになるので、たぶん今の子どもたちと全く違う景色を見て育つことになると思います。こんな世界があるのかみたいな。道を間違える子も出てくるかもしれないですが。

(深田委員)

高校の演劇部の発表会がありますけれども、だいたいみんな瀬戸内海側のホールを使って発表会をしていますよね。機会があればこちらのほうで、そういう発表会をやれば、また違うだろうと思いますね。

**【日程5 閉会】**

(教育次長)

それではこれもちまして、平成30年度第2回の豊岡市総合教育会議を閉会いたします。

---

閉会 午後3時25分

---